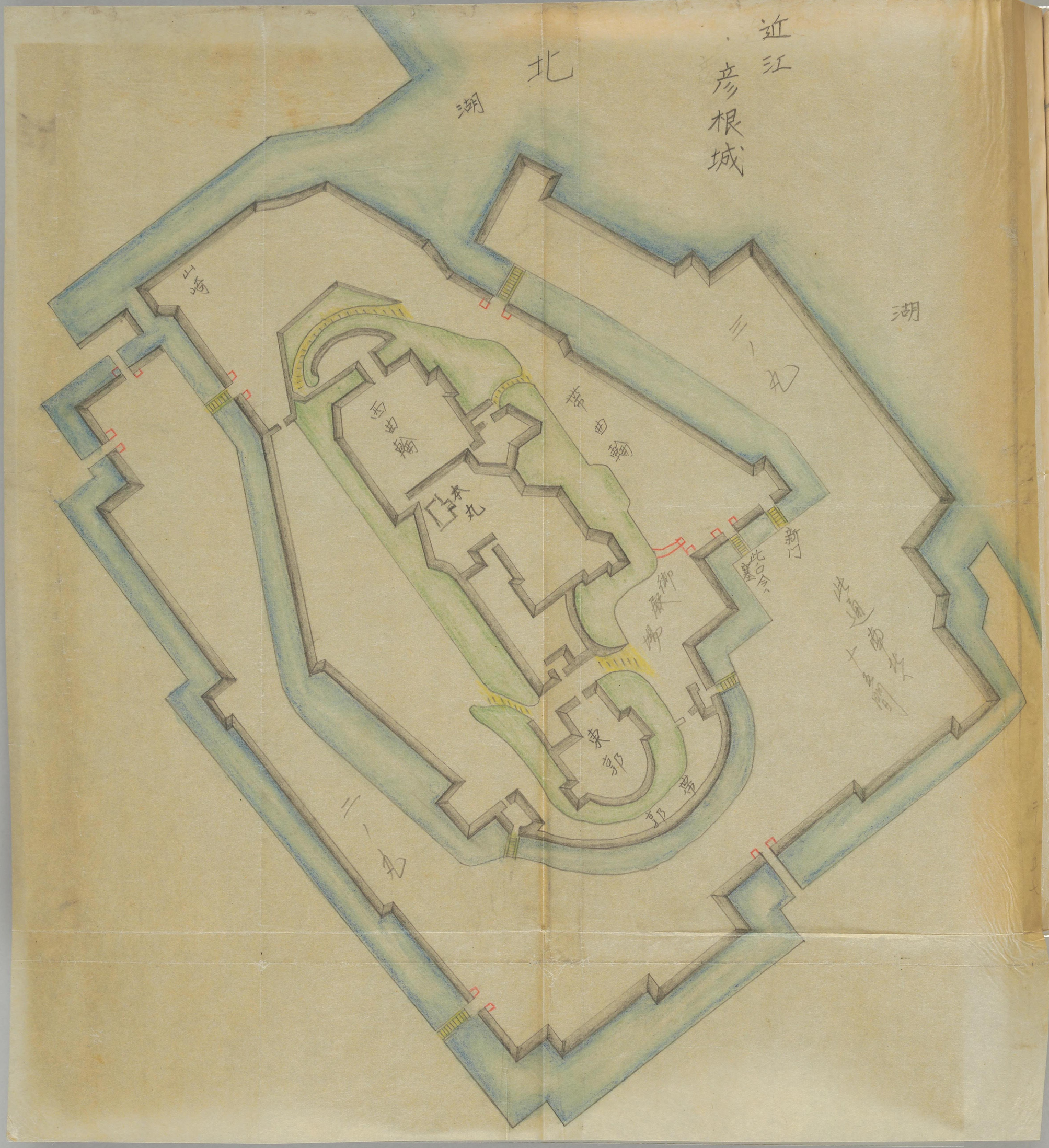
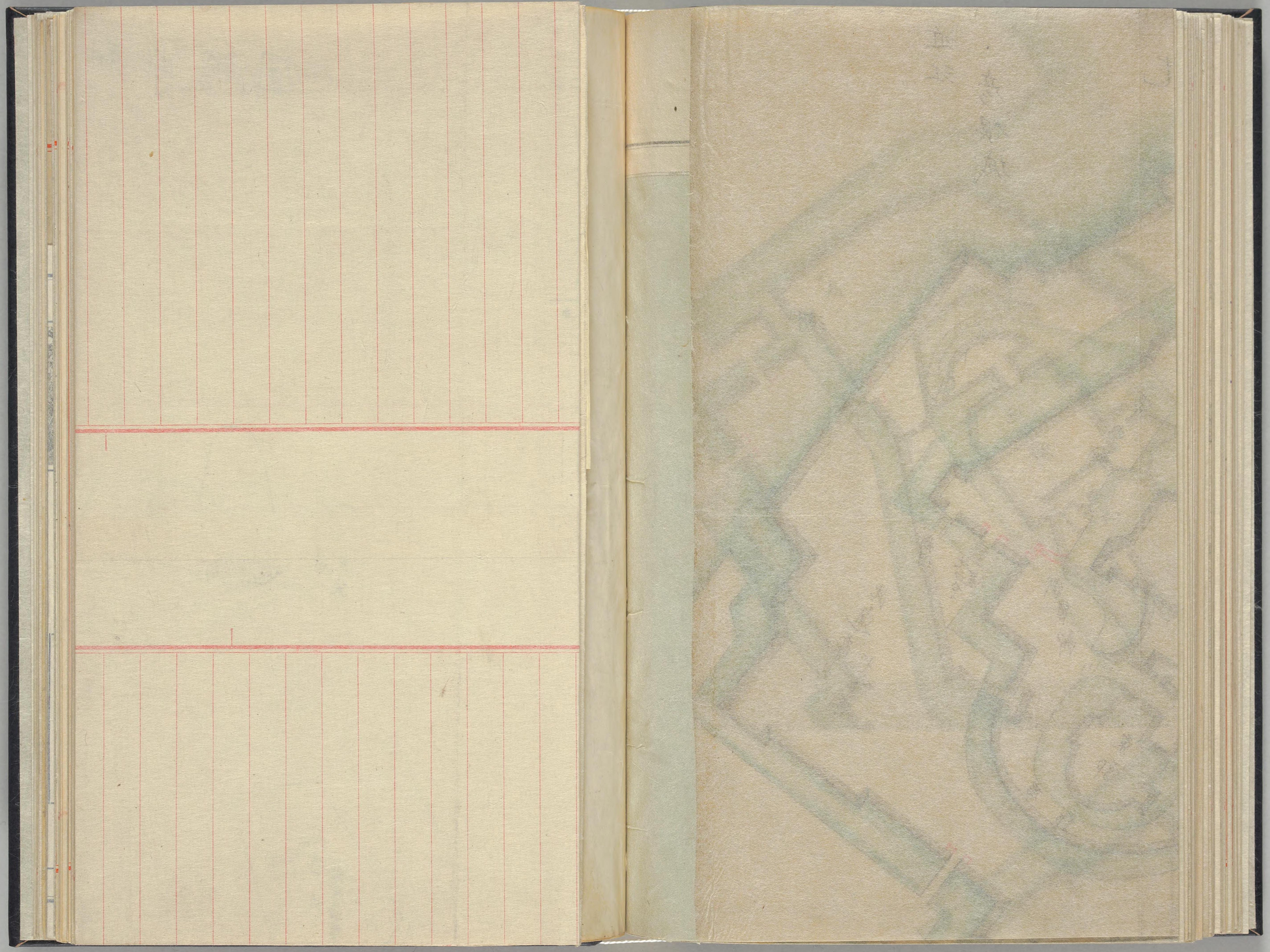
国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

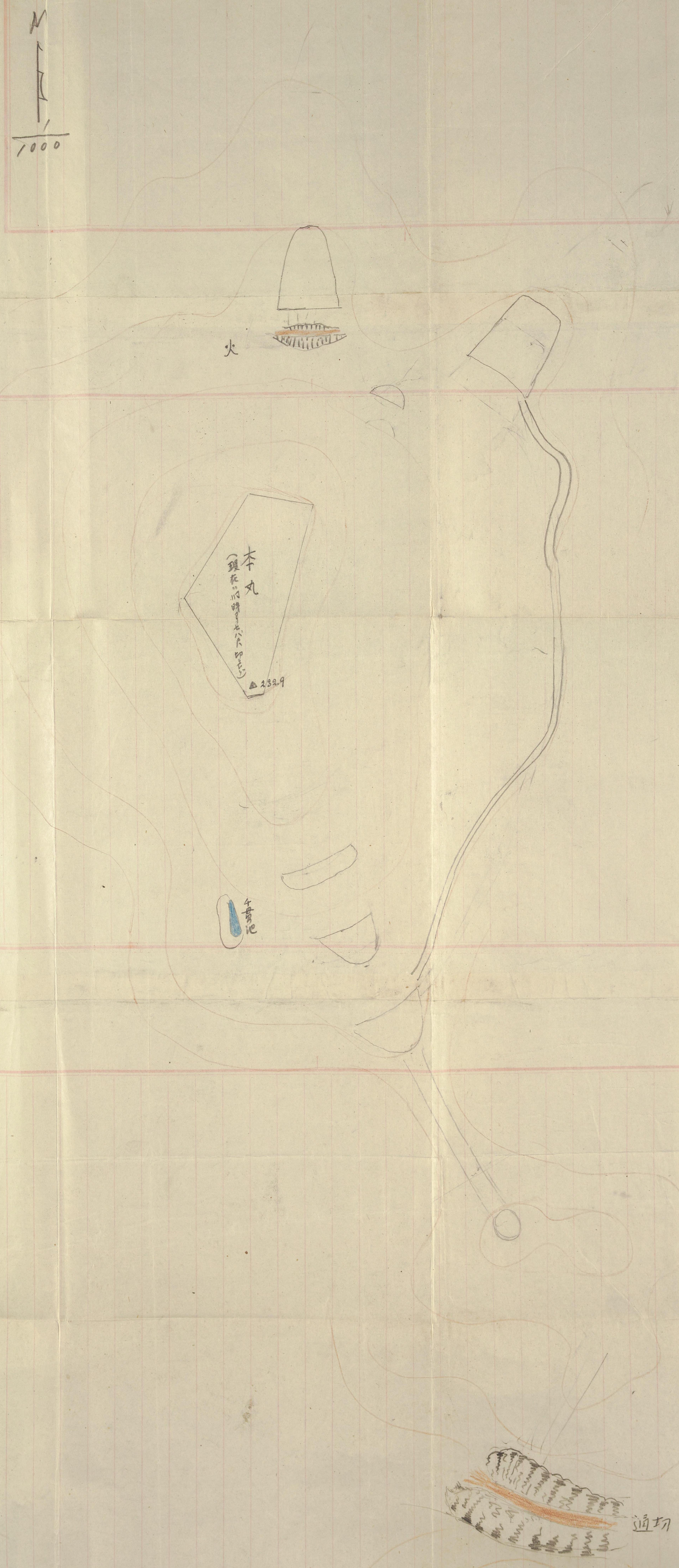


国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



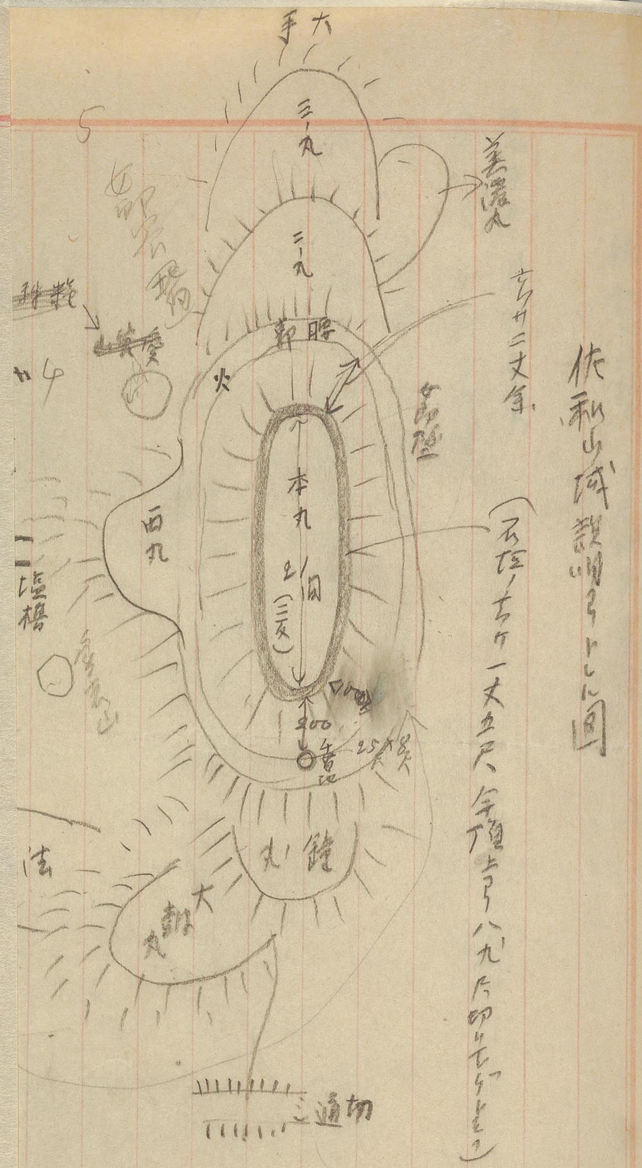
国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

佐和山城図



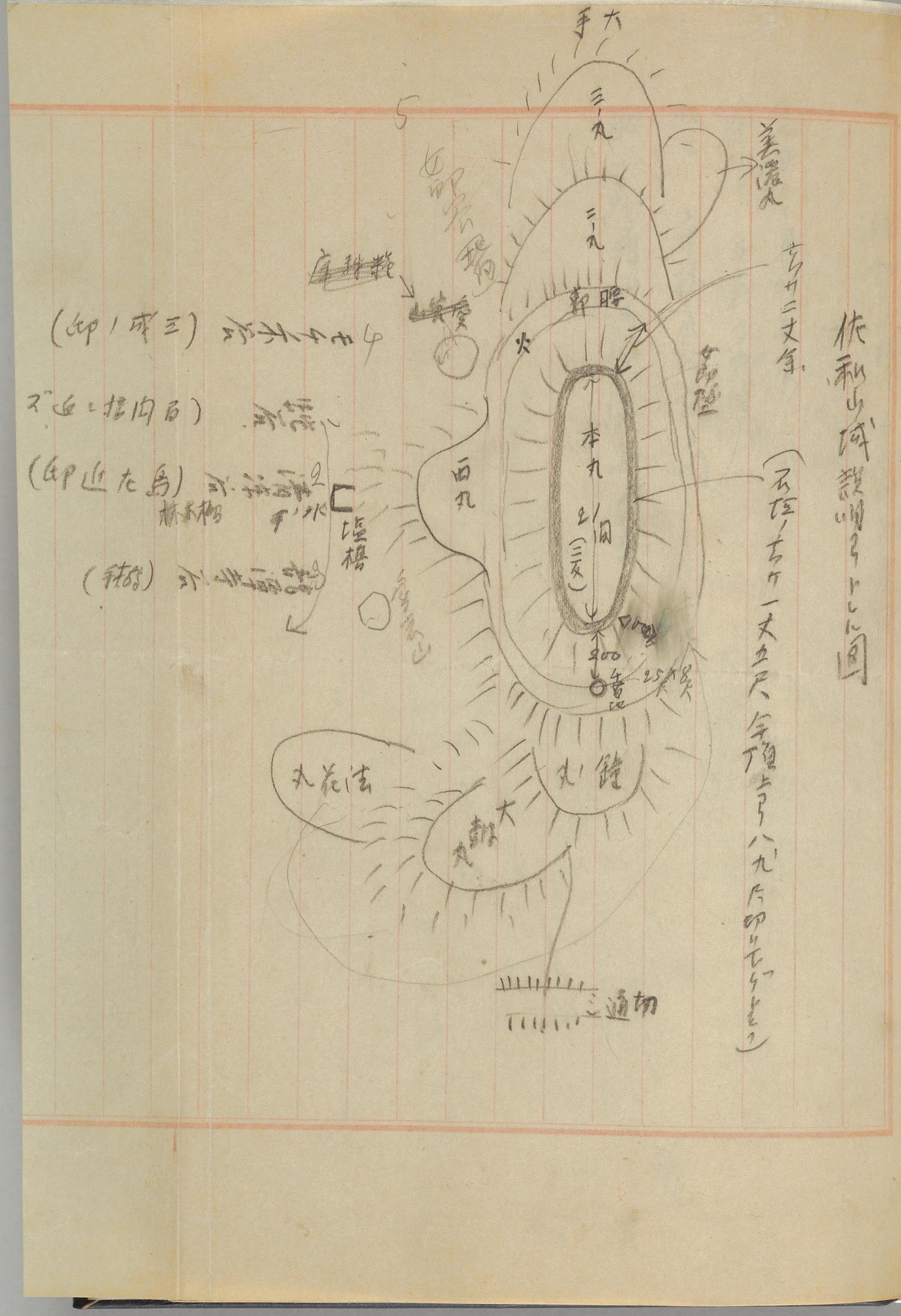
所説区々ニテ部ノ名称ヲ附シ難シ

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



佐和山城説明ヲトレル図

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

佐和山功輩　宇都磯郡　呂昌

東百々ニ丹羽長秀
南ニ　小郷正郷守
北ニ　市橋九印左ニ門
西　彦根山ニ　阿尾其名来

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

佐和山城攻撃経過一覧表

九月十五日、関ヶ原戦後徳川家康ハ石田三成ノ居城佐和山城ヲ攻撃スベク井伊直政ヲ総軍トスル佐和山ニ向ケ出発シ夜直政ハ佐和山ヲ距ル各約十一丁ノ地点ニ着陣ス

〃　十六日　真夜中、諸隊陸続出発

〃　十七日　諸隊勝時当陣ヲ終リ初若ノ宮ノ町ヲ
　　幕府ハ　脇坂安治　小早川秀秋、朽木元綱ヲ附ス井伊直政ヲ総軍トスル佐和
　　脇坂安治　小川祐忠
　　小早川　田中吉政　宿都長盛

前隊ハ平田山ニテ防戦ヲ突破シ井伊直政ハ本隊ヲ率ヒ
正午ハ平川ノ決戦ヲ開始シ午前中ニ山ヲ越シ陸ヲ突破
戦ヲ開始ス

脇坂朽木、赤座ハ之ヲ宇賀山ヨリ攻撃
松則房長谷川守知ノ諸隊ハ戦ヲ二時ニ終リ
高地ヨリ逃ル小早川ハ陸ニ前者ヲ針ヲ
ヨリ逃ル小早川ハ陸ニ進ム

水手ト同ジ其時ヲ以テ松ヲ松ニテヒロガ旧墓ニ
津田清幽ヲ抑ヘ清幽ヨリ北ヨリ正面ニ突ヲ正面ニ
進ム各隊ハ各進前後ヨリ清幽ヲ挟撃ス清幽ハ
防戦ノ術ヲ失ヒ清幽ハ抑ヘラレ清幽ハ
城ニ生命ヲ絶ヘタル後ハ城ヲ守ルヲ
城ニ入ル

〃　十八日　田中ノ手ニ入ル城ヲ入ル
ヲ本丸ニ新ニ入ル正面ニ
清幽ハ城ヲ落ス
共ニ
ヲ攻撃ス
ヲ入ル
ヲ入ル

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

柳ヶ瀬役戦手經過表

	伊勢方面	岐阜尾張方面	近江方面	越前及北陸方面
天正十年 7月		清洲會議ニ手筆迴勝ヲ敵秀長ニ長濱ヲ求ム秀長勝豊ニ讓ル秀吉岡進ヲ帰ル		

陸軍

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

柳ヶ瀬役戦手經過表

	戦前ノ情況					戦況							
	天正十年 7月	8月	9月	10月	11月	12月	天正十一年 1月	閏 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7
伊勢方面														
岐阜尾張方面	清洲會議ニ於テ宇喜田勝家秀吉ニ長濃ヲ求ム秀吉勝豊ニ讓ル秀吉河邊ヲ歸ル		織田信孝三法子丸ヲ安土ニ移サズ兵ヲ擁シ勝家ニ勝セシム且滝川一益ヲ誘ヒ秀吉ヲ攻ント策ス	一益策ヲ長期間ニ戦フヲ不ス八月ヲ以テ信孝ハ日秀吉ニ書ヲ送リ其ノ勝家ト和セントスルヲ求ム		十八日秀吉美濃ニ入リ二十日大垣ニ出ヅ岐阜ニ返ル 下旬信孝和ヲ求ム秀吉許ス三法子丸ヲ安土ニ移シ信雄ニ托シ秀吉二十九日宇津城ニ歸ル							
近江方面						秀吉近江ニ入リ長浜ヲ勝豊ヲ降ス(中旬)下旬柳ヶ瀬附近ノ地理巡視ス							
越前及北陸方面				勝家モ一益ノ策ヲ善シトシ和ヲ求ム幼主ヲ補佐セシムルヲ秀吉ニ求ム										

国立国会図書館　[日本城郭史資料] 第22冊　本別20-4

月

北軍

柳ヶ瀬役經過表

南軍

陸軍

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

柳ヶ瀬役經過一表

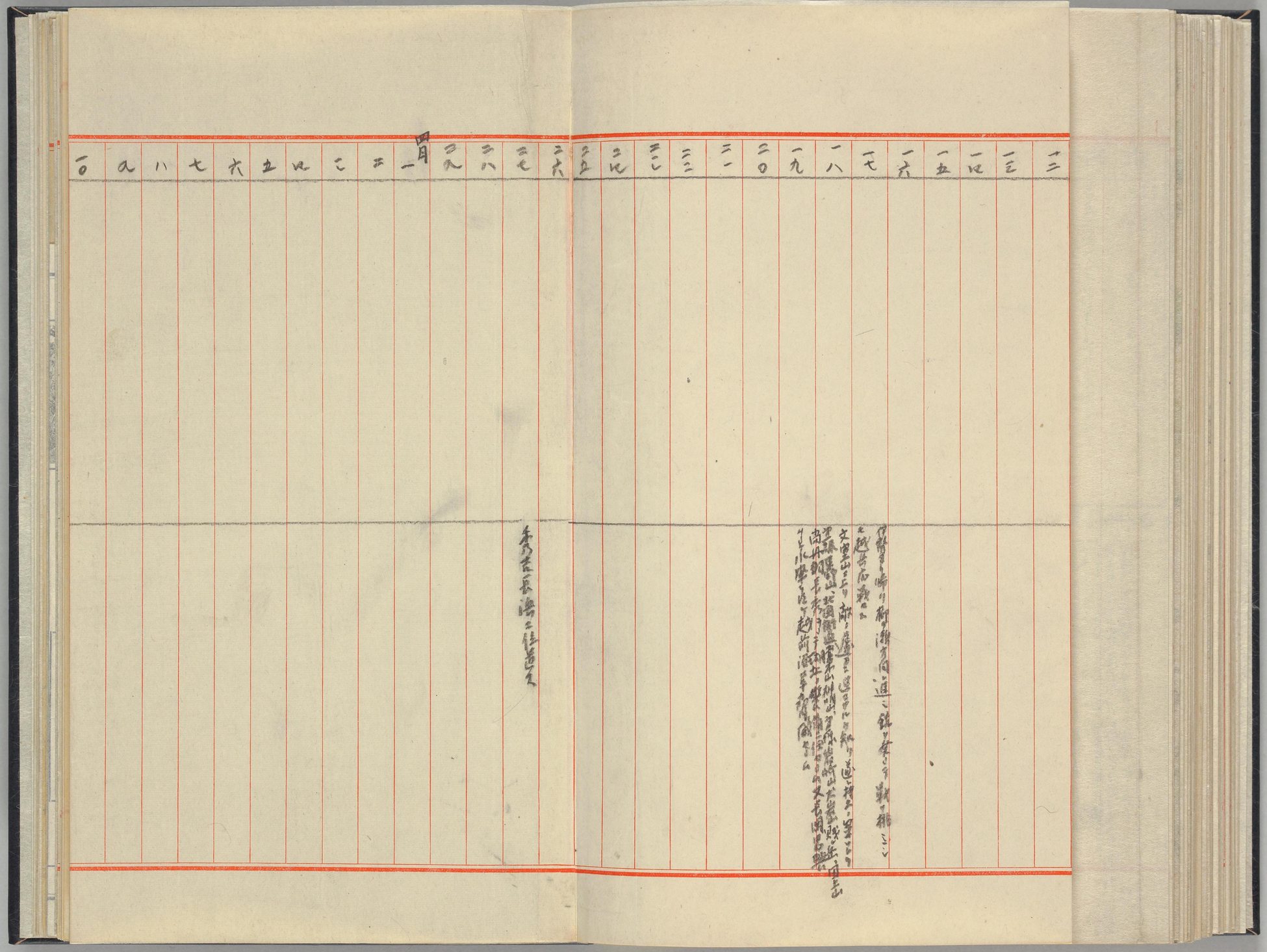
天正十年　天正十一年

月	北軍	南軍
十二月	十日勝家秀吉ニ使者ヲ送リ和ヲ請フ秀吉之ヲ拒ム	京都 信孝ノ三法師ヲ擁シテ安土ニ入ルヲ聞キ七日京都ヲ發シ岐阜ニ向フ 長濱 十三日長濱ヲ占領シ學田勝豊ヲ降シ（甲賀）佐久間信盛ヲ守備セシム 大溝 堀秀政ヲ守備セシム
閏正月		重臣 秀吉伊勢ヲ經略セシメ自ラ安土ニ入リ諸將ヲ集會
正月	岩間大次郎氏ノ留守中近江ヲ經テ伊勢ニ入リ神戸城ヲ降シ次テ關城ヲ降ス	姫路
二月	三日勝家從二位ニ叙セラル	安土 秀吉伊勢ヨリ還リ安土ニ入リ諸將ヲ集會
三月	信孝北軍ヨリ離リ門止諸城ニ放火シ南軍ニ投ス 勝家岐阜ノ柴田勝豊ノ部將ヲ誘フ	伊勢 秀吉伊勢ヲ經略シ（七日）神戸城ヲ降シ關城ヲ降ス 秀吉長秀ヲ伊勢ニ殘シ兵ヲ率ヰテ安土ニ歸リ諸將ヲ集會（十日）岐阜ニ向フ 秀吉長秀ヲ伊勢ニ殘シ兵ヲ率ヰテ安土ニ歸リ諸將ヲ集會（十日）岐阜ニ向フ
四月	十三日山路正國降ル 十四日佐久間盛政等大岩山ニ據リ秀吉ノ軍ヲ擊ツ 前田利家ノ軍ヲ擊チ

柳ヶ瀬役戰爭經過表

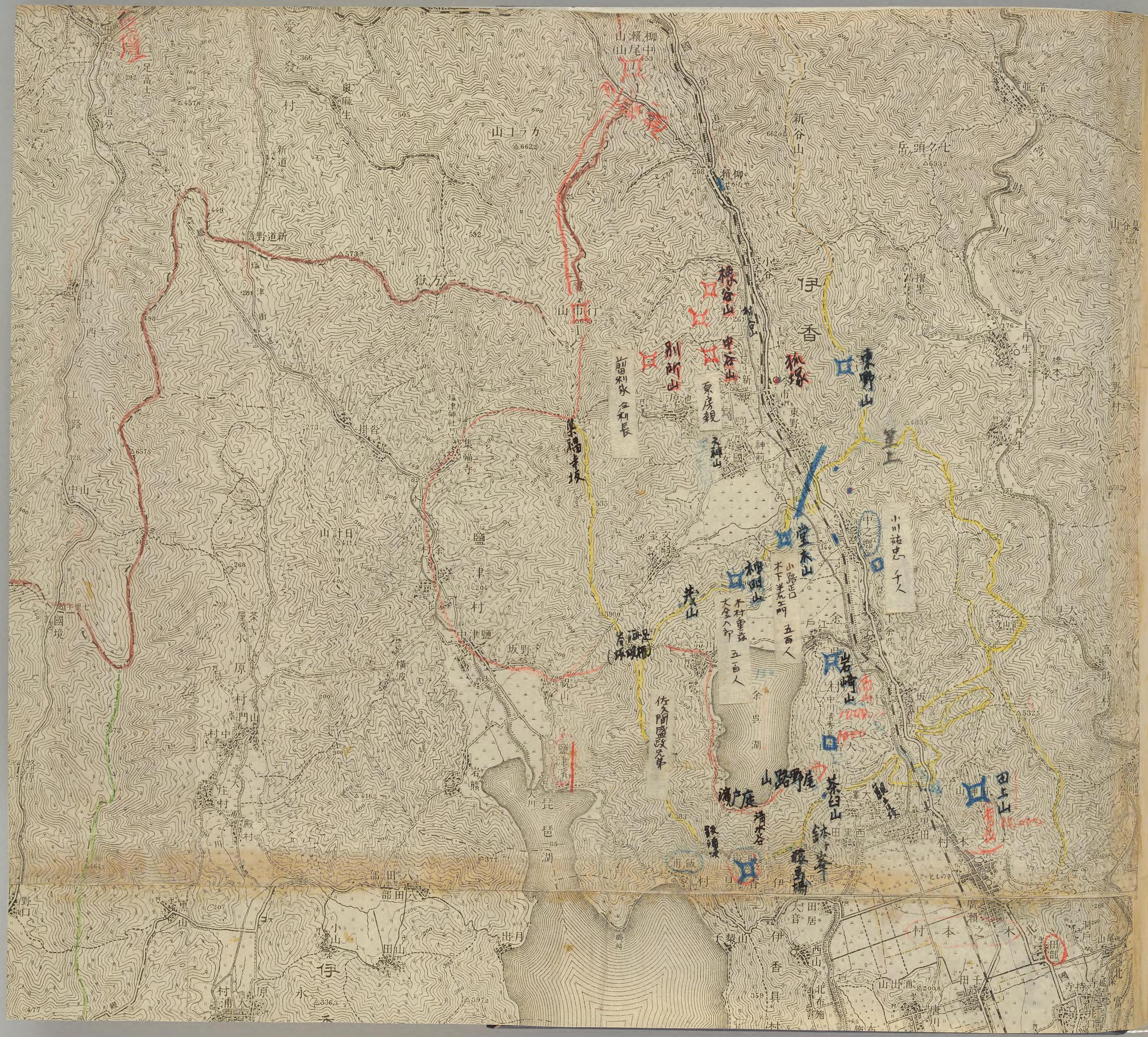
月日	北軍	南軍
二月二八	役夫ヲ使用シテ沿道ノ雪ヲ除ク事ヲ山	
二九		
三月一		
二	佐久間隊常常 各數人ヲ以テ北ノ庄ヲ出發	
三		
四	此日勝家二万ノ兵ヲ率ヒ北ノ庄ヲ出發	
五	佐久間隊進ニ入ル	
六		
七	佐久間隊一部ヲ以テ天神山ノ岸ニ通ヲ過ス高附近部落ニ放火シ進テ柳ヶ瀬附近ニ駐屯ス	
八		
九	勝家進ニ入リ中尾山ノ陣ニ前ニ動ヲ誘ク即チ別所山、樓森山、林谷山、中谷山、行市山	
一〇	佐久間隊又高時川ニ北ヲ大ク此ノ間勝家ノ部將ニ蜂蝶ヲ勸ム	
一一		

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

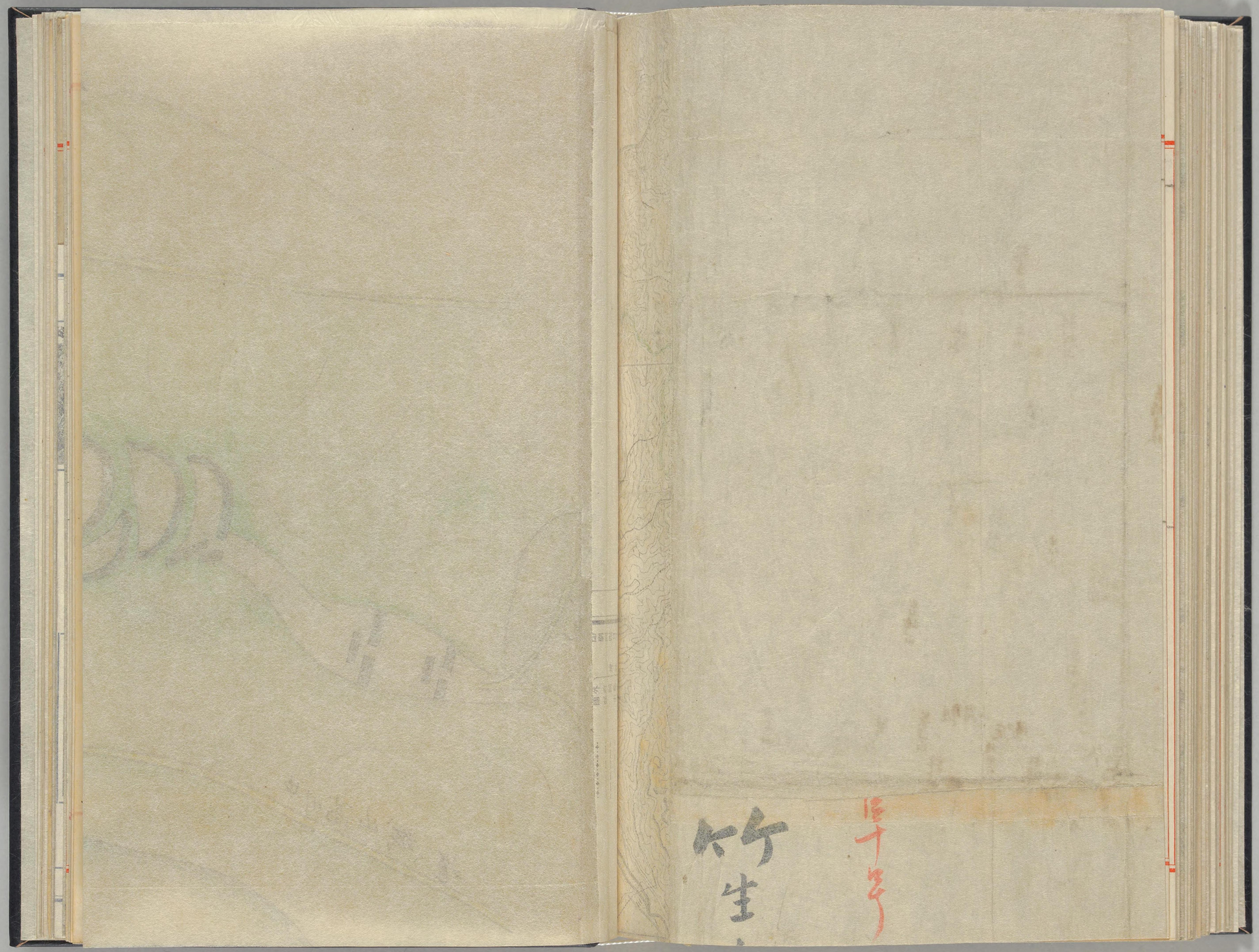


国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

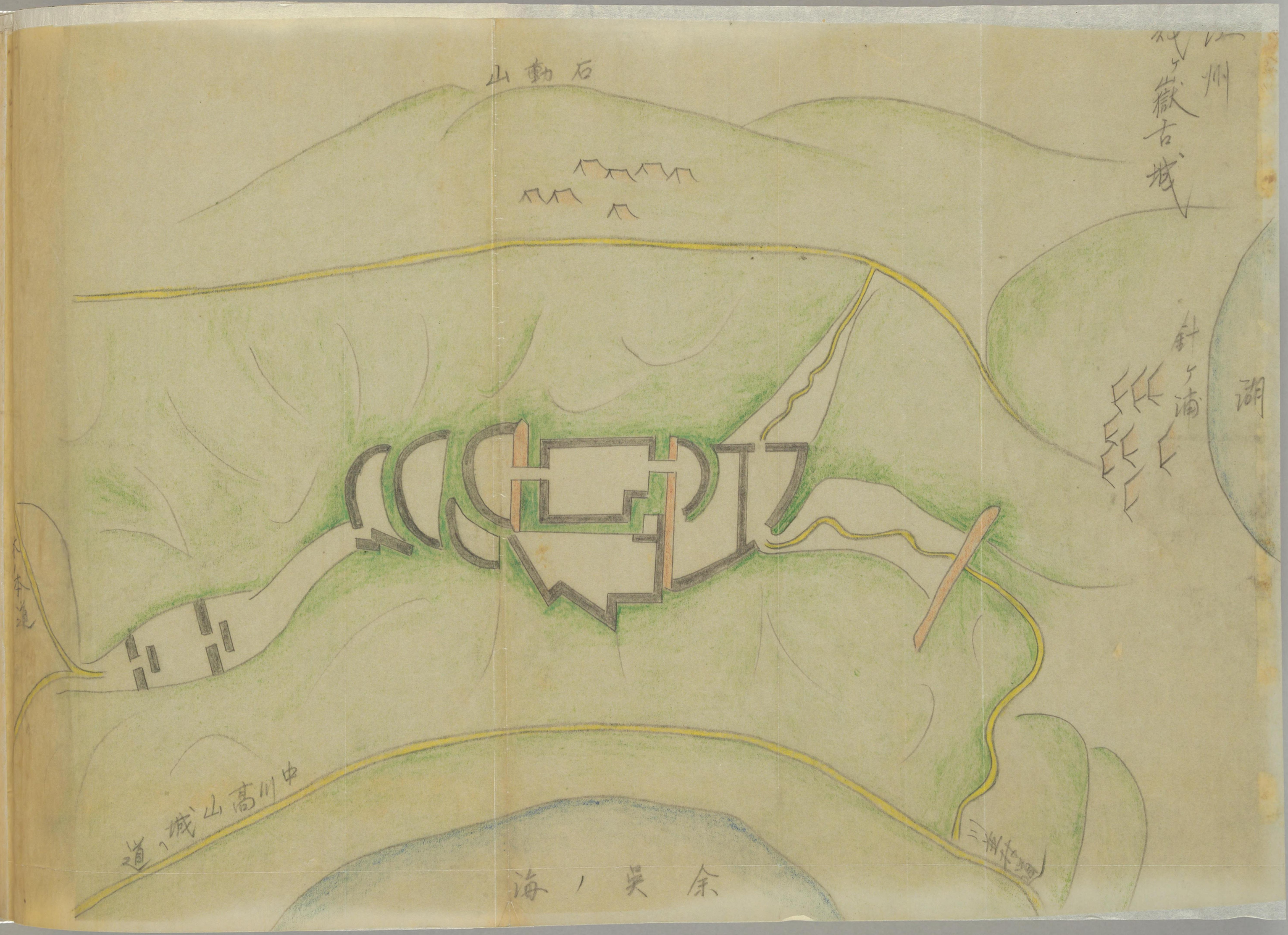
国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



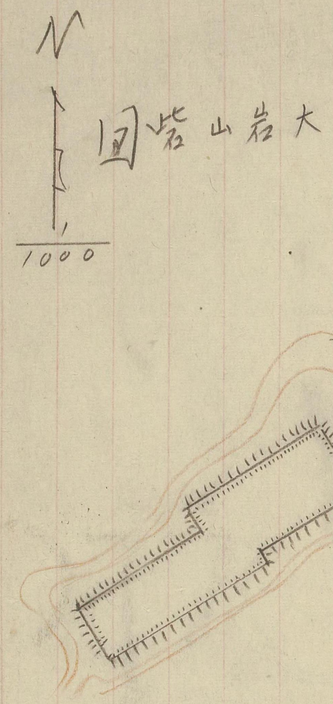
国立国会図書館　[日本城郭史資料] 第22冊　本別20-4



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

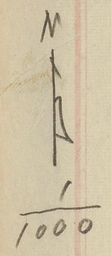


国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

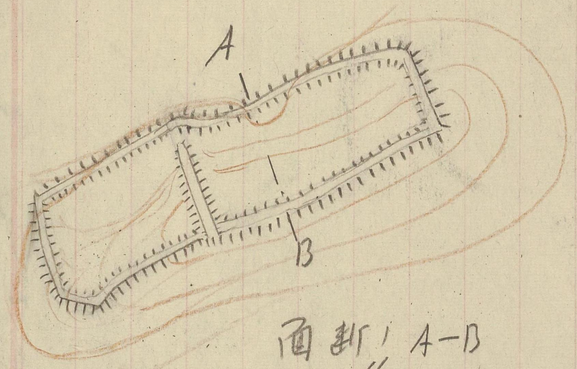


大岩山砦図

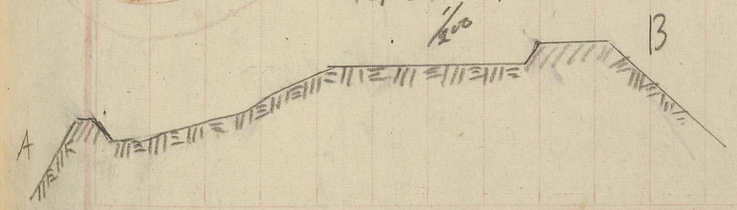
国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



図紫岳ヶ賤



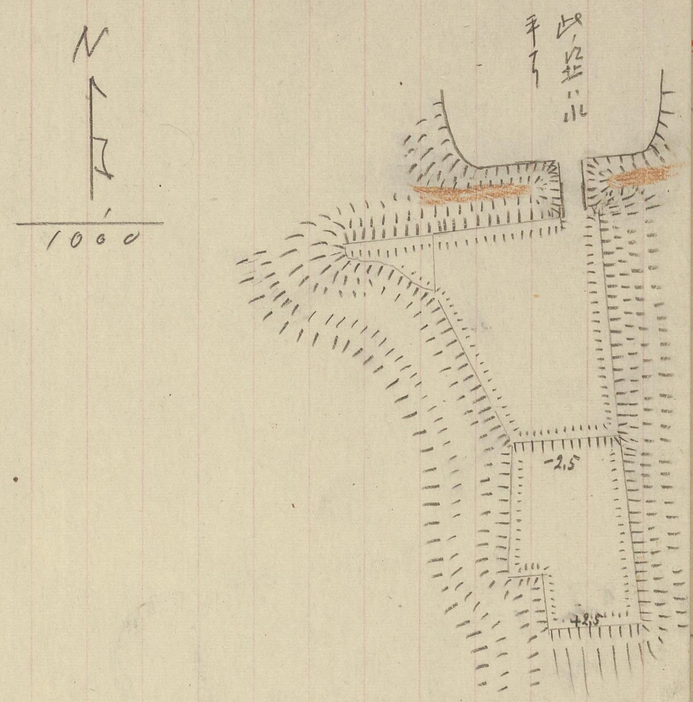
面断 A−B



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

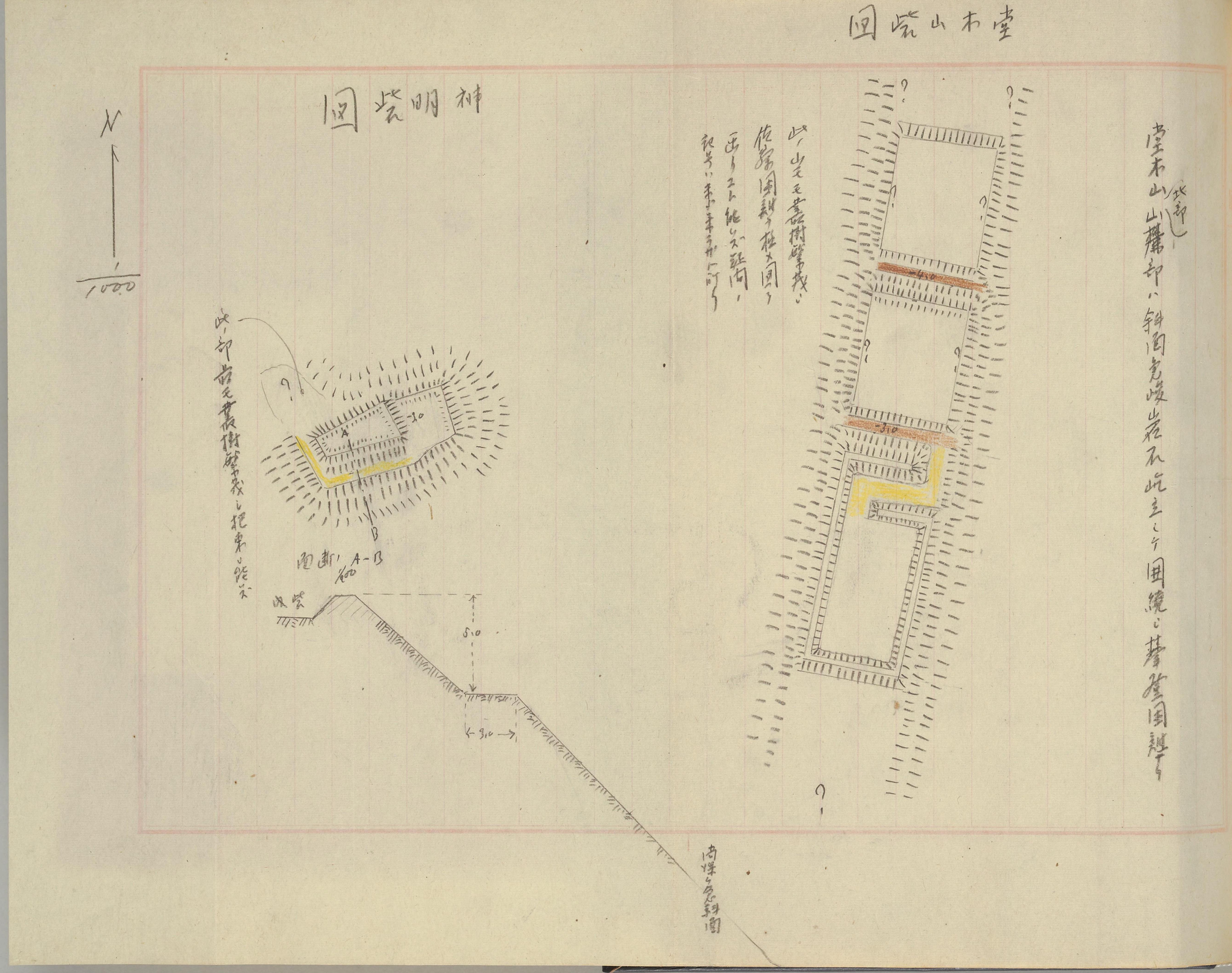
堂本山（北部）山麓部ハ斜面急峻岩石此立ニテ囲繞ニ攀登困難ナリ

田上砦図

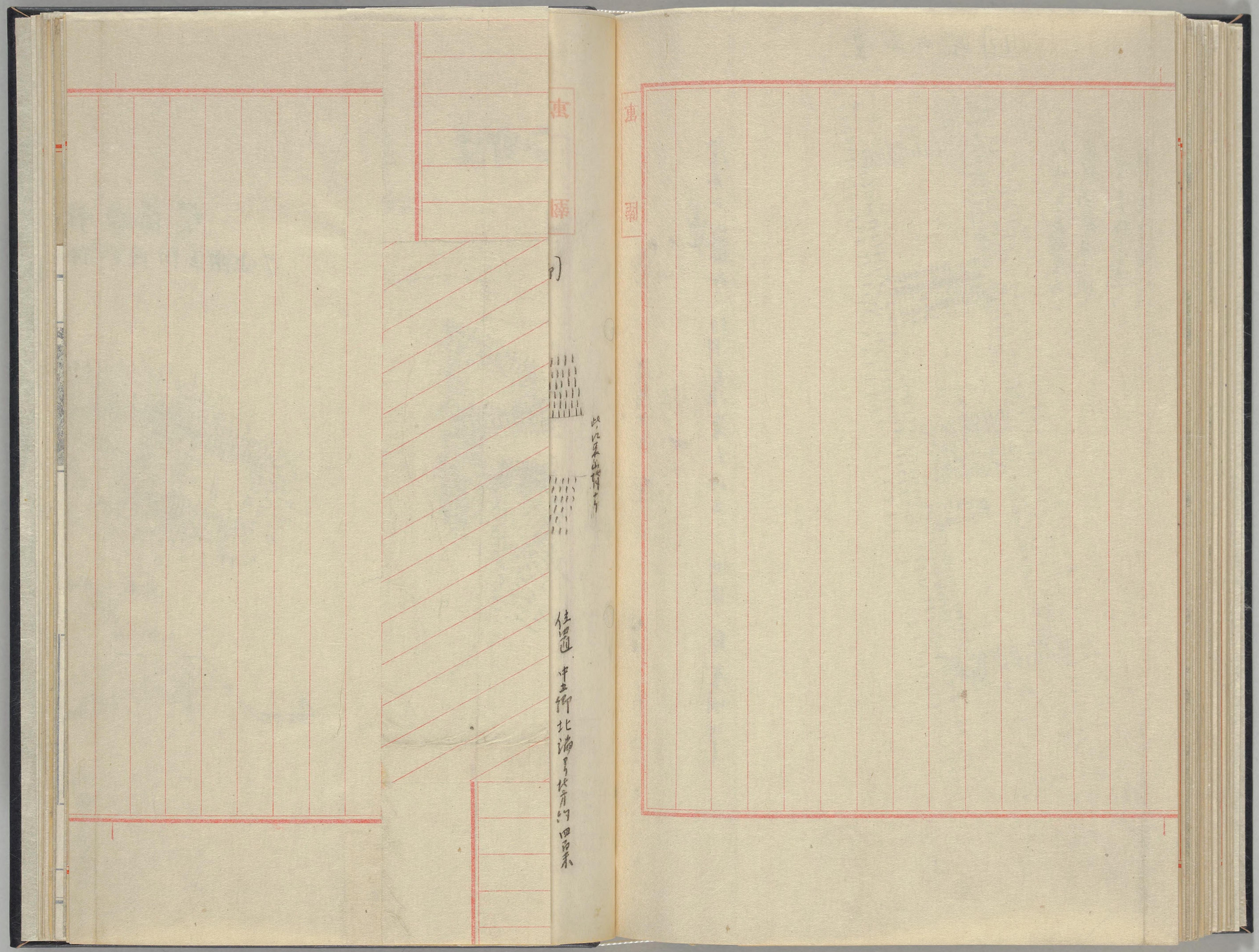


此ノ南方緩斜面ニ（幅約十米）ナリ

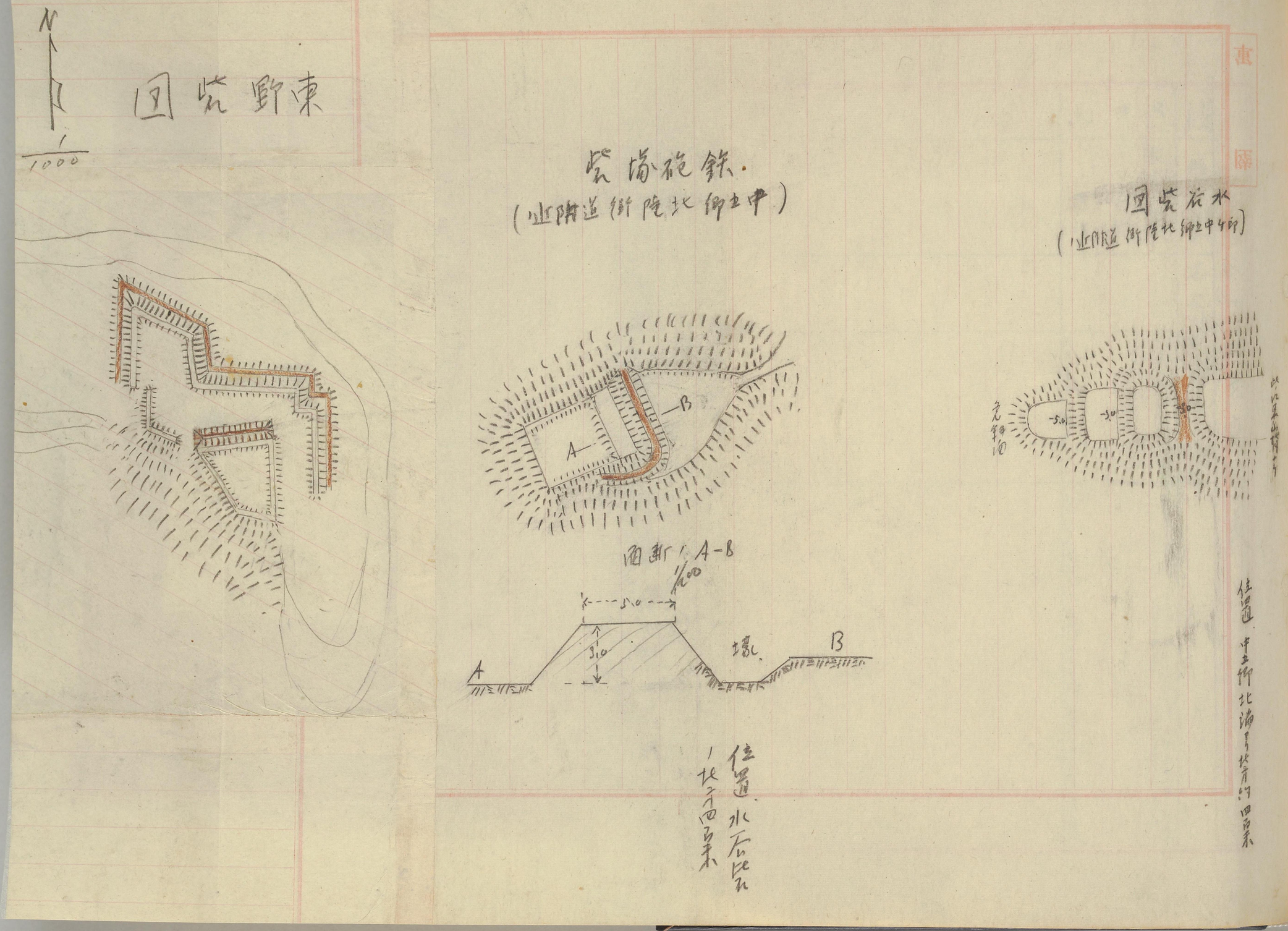
国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

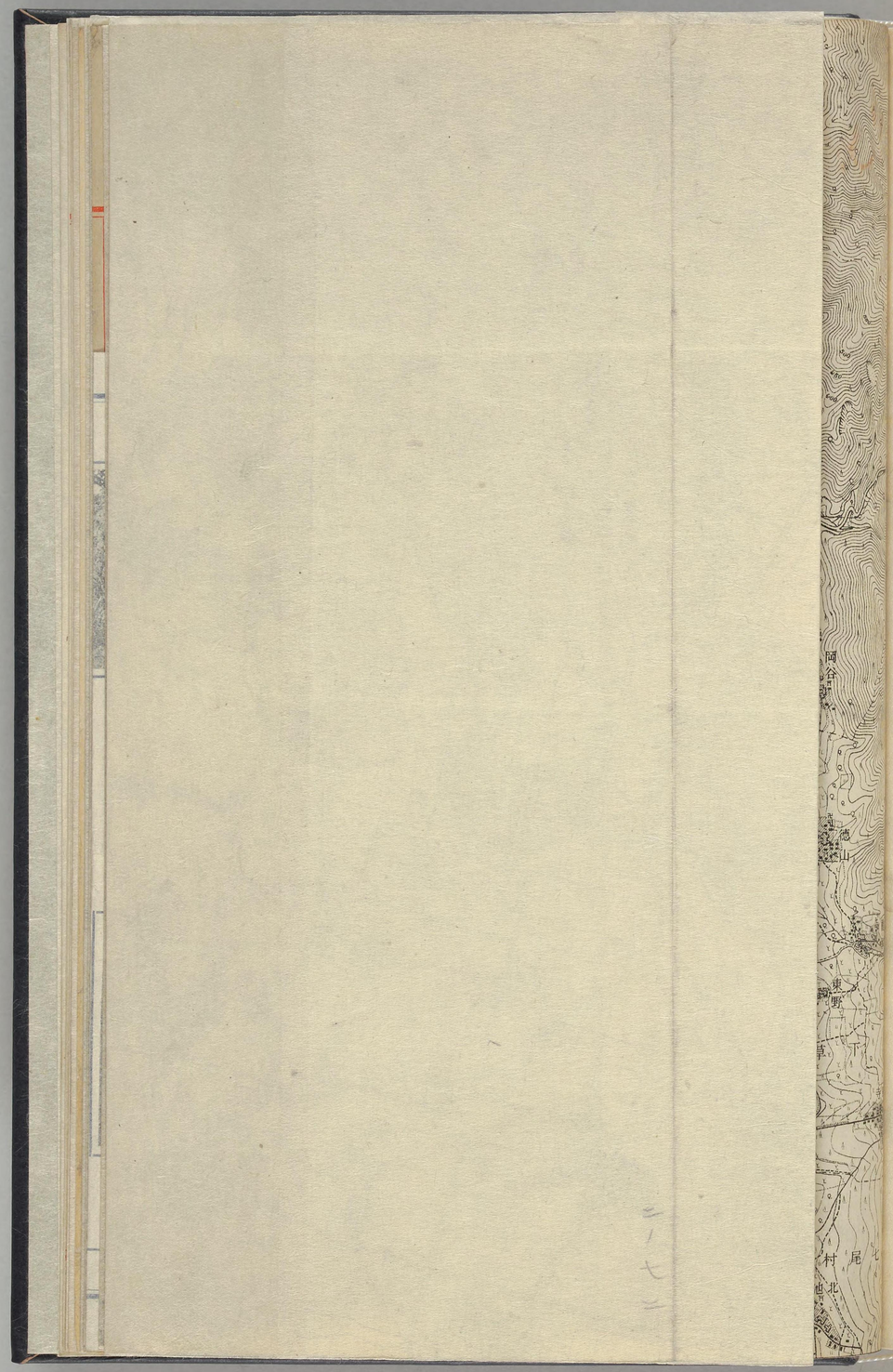
小谷山城主変遷表

藩主	城主	石高	期間	備考
淺	淺井亮政		永正十三年三月	淺井氏四代亮政、ソノ主上原泰舜ヲ近江金濱、上坂ノ兩城ニ攻メテ之ヲ遂ヒ初メテ當城ヲ築ク。（國史大年表）。「大田氏ノ年表ヨレバ八月ナリ」
井	〃 久政		天文十五年七月	
氏	〃 長政		天正元年九月	入月、信長當城ヲ攻ム。久政、廿八日自殺、長政九月一日自殺ス。以後ニ廢城。

3代 58年

陸軍

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

山崎丸、福壽丸、京極馬場、燒丸、一丸、二丸、三丸、櫻馬場、大守居、

御本丸　出丸　金吾丸、玄馬場

二ノ七二

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

小谷城趾

凡例

1	2	3	4	5	6	7	
山王丸	小丸	京極丸	中丸	本丸(鐘丸)	大廣間	番屋敷	
8	9	10	11	12	13	14	
柳馬場	御馬屋	御茶屋	雨尾屋敷	櫻馬場	首据岩	黒金門	

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

小谷城趾

凡例

1	2	3	4	5	6	7	凡例
山王丸	小丸	京極丸	中丸	本丸(鐘丸)	大広間	百屋敷	
8	9	10	11	12	13	14	
柳馬場	御馬屋	御茶屋	市尾屋敷	櫻馬場	首据岩	黒金門	

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

大廣間趾

千疊敷とも言はれ、東西三十間南北一町餘、城廓の主要箇所であつた。大正十一年滋賀縣保勝會に依つて「史蹟地小谷城趾」の石標が建設された。

黒金御門趾

城中最も重要な門の一つであつた。彦根築城の際移されたと傳へられ、今猶巨然たる礎石を殘してゐる。

首据石

東面の險崖の端に懸つた物凄い箇所に立つてゐる。今井秀信の首級を梟した所だと言ひ傳へられてゐる。

小谷寺

眞言宗豐山派である。もと常勝寺と稱し奈良朝の昔越前の大德泰澄の開基に係り中世衰頽したのを永正年間淺井氏の祈願所として寺田を附せられ小谷寺と改稱した。天正元年信長の兵火に會ひ、秀吉の時代に再び寺運復興し家康も秀吉に倣つて寺領四十餘石を寄進した。これより先、永享元年後花園院から如意輪山の勅額を附せられてゐる。寺域は登山口に當り楓多く春秋の眺めは殊によい。

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

本丸
上山田二至ル
下山田二至ル
六坊
山王丸
小丸
京極丸
中丸
天守臺
黒金御門趾
首据石
出丸
金吾丸
番所
馬洗池
大野木下屋敷
大野木屋敷
刀洗池
太岩
顧高丸
蛙岩
井筒池
山崎丸
脇坂
小谷小學校
役場
丁野二俣二至ル
丁野山
大鳥山
山脇山
美濃山
郡上
信長丸
虎姫山
山脇河毛二至ル
御屋敷
徳勝寺趾
遠藤屋敷
包善院趾
木村屋敷
西本町
別所
虎姫二至ル
東本町
小谷寺
雲雀山
伊部
留目
虎姫長濱二至ル
伊吹山
近江長岡
醒井
東海道本線
小谷山
姉川
北陸本線
米原
木之本
虎姫
長濱
高月
賤ヶ岳
琵琶湖

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

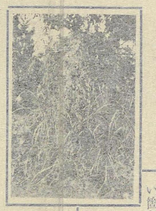
小谷城趾案内

伊吹、草野、美濃境の山々を背景に、姉川の清流を前に、江北の中天に蟠居する小谷山は海抜雑と五百米、淺井氏三代、つはものどもの夢の趾を包んで吊古の客を待つてゐる。相距る四百年の昔、六角、京極の兩氏相爭ひ、江北の京極勢漸く衰へた永正十三年、その家臣淺井亮政によつて此處に城廓は構營された。京極氏の奸臣はために離間して江南の六角氏と通じ、大擧攻取の兵を出したが亮政は寡兵を以てその大半を粉碎し、あまつさへ京極氏を迎へて江北を一統した。その後、久政及び長政に至つて所謂群雄割據の大立物となり、この城に大守を擁して四方に雄視した。斯して信長の如きもその入京を企つるに先だち、長政に和平して妹お市の方を配するに及んだが、越前の朝倉氏に連具して遂には反目するの止むなきに至り、元龜元年の姉川役を經て、天正元年この金城湯池の要塞を兵火に委し、父子共に自盡して五十七年間の經緯を示した。爾來三百五十年、當時の雄圖は一もその現狀をとゞめてはゐないが市坊の名殘や館舍のあと、小嶌大嶌に構營された堅固な城塞のあとは隨所に礎石散乏を殘して、山何處にありやの感を深うせしめ、武將の愛馬に領つたところ、絶世の佳人が臙脂の水を流した廓は憂草に埋れ、心なき紅葉に映つて、遊子の想ひを遠く矢叫びの昔にかへさせる。

北陸線虎姫驛から東北一里、高月驛から東南近い一里、何れも坦々たる大道で、鬱蒼たる城趾の山を眺めつゝ一時間足らずで登山口に達する。案内圖の史蹟を順序よく辿つて山道約一里、春から秋へかけて一日の行樂には相應しい勝地である。

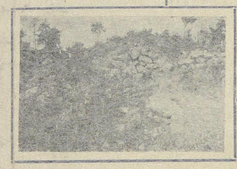
大廣間趾

千疊敷とも言はれ、東西三十間南北一町餘、城廓の主要箇所であつた。大正十一年滋賀縣保勝會に依つて「史蹟地小谷城趾」の石標が建設された。



首据石

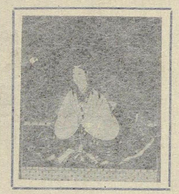
東面の險崖の端に臨い箇所に立つてゐる。信の首級を載と言ひ傳へられてゐる。



山王丸

淺井氏に依つて大山咋命を勸請された所である。境内には辨財天をも合祀されたと言はれてゐる。

妻夫政長井淺



馬洗池

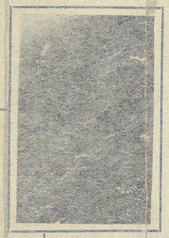
廐趾に續いた四間に二間半程の池である。底は石疊になつてゐて眞夏でも不思議に水な湛えてゐる。

登山口

小谷寺の西方一町あまり由丸の東側に位し昔は道手道になつてゐた。

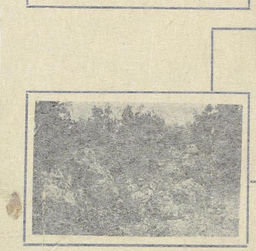
小谷山林相

何れの方面より見ても林相美しく、殊に名産小谷松茸は毎年好評を博してゐる。



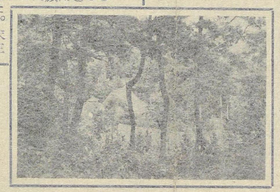
黒金御門趾

城中最も重要な門の一つであつた。彦根築城の際移されたと傳へられ、今猶巨然たる礎石を殘してゐる。



小谷寺

眞言宗醍醐山派で勝寶と稱し、當寺も亦良尊僧正の創開にして、中興の祖と仰がれた。天正元年小谷城陷るや兵火に罹つたが、慶長年間再び復興し、四十石を寄進せられ、時の住職秀圓上人は學德兼備の聞え高く、遠近より參詣する者多く、春秋の登山口にあたり、殊に楓樹は有名である。



小谷城

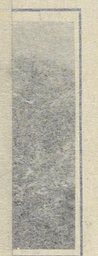
一、縮成。居館郡上ノ東方谷地ノ奥ヲ谷底ニ置キ大嶽山地上十谷及土レヨリ流ルル馬蹄形山背上ニ紫墨ヲ設ク而シテ城郭ノ重要ヲ東部山背ニ置ク大嶽城ノ背面ヲ防衛スル爲其ノ北方ニ流ルル山背燒丸ニ三箇ノ壘鑿ヲ設ク

二、細部要図ノ如シ

陸軍

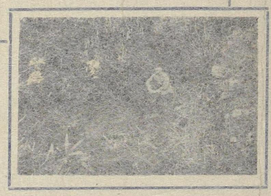
山王丸

淺井氏に依つて大山咋命を勸請された所である。境内には辨財天をも合祀されたと言はれてゐる。

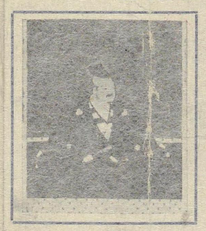


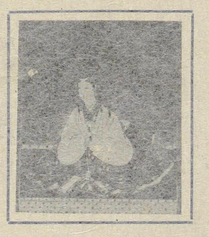
馬洗池

厩趾に續いた四間に二間半程の池である。底は石疊になつてゐて眞夏でも不思議に水を湛えてゐる。



淺井長政夫妻





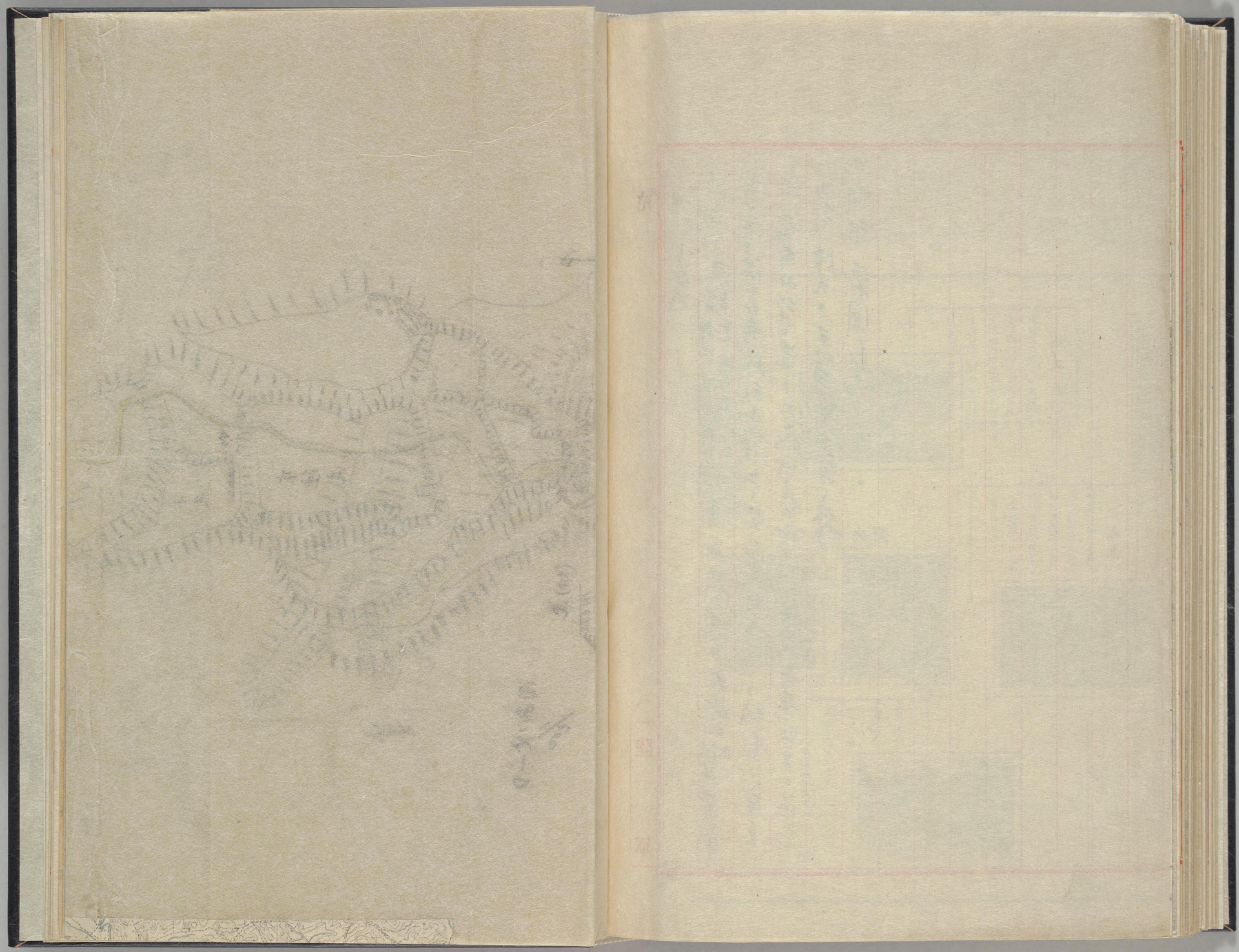
登山口

小谷寺の西方一町あまり出丸の東側に位し昔は追手道になつてゐた。

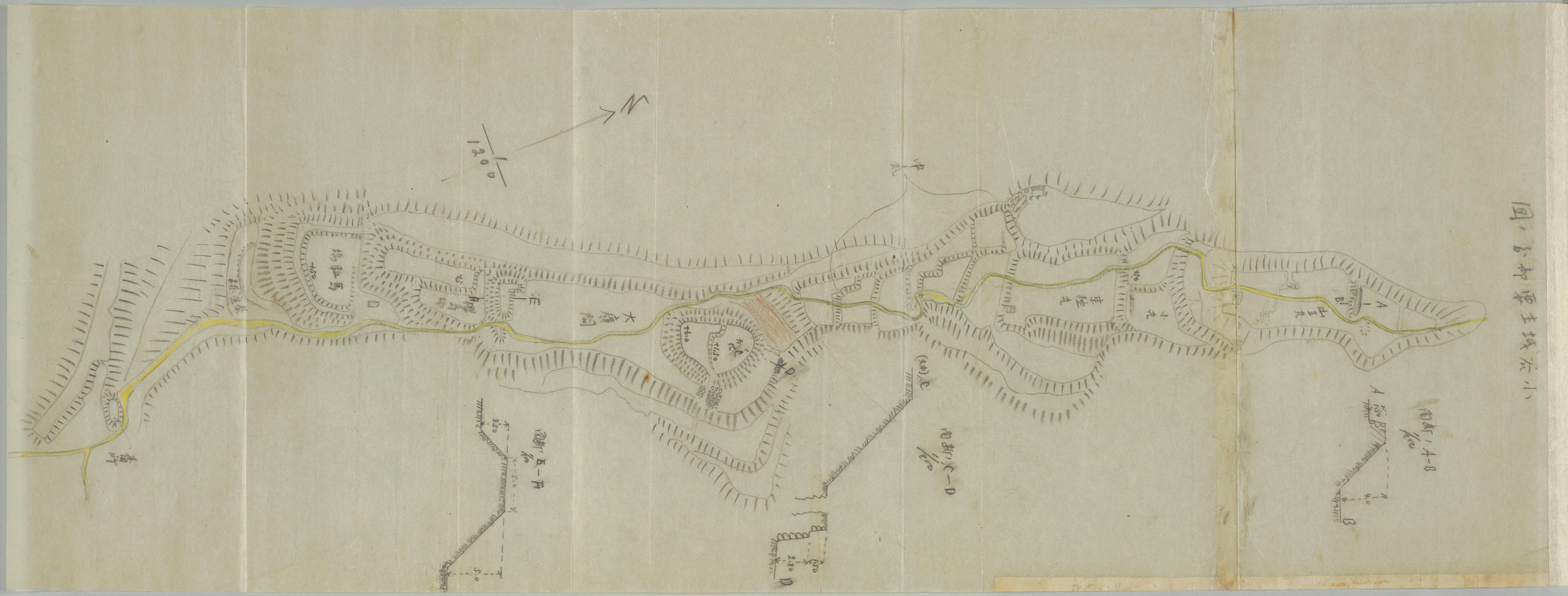
小谷山林相

何れの方面より見ても林相美しく、殊に名産小谷松茸は毎年好評を博してゐる。

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



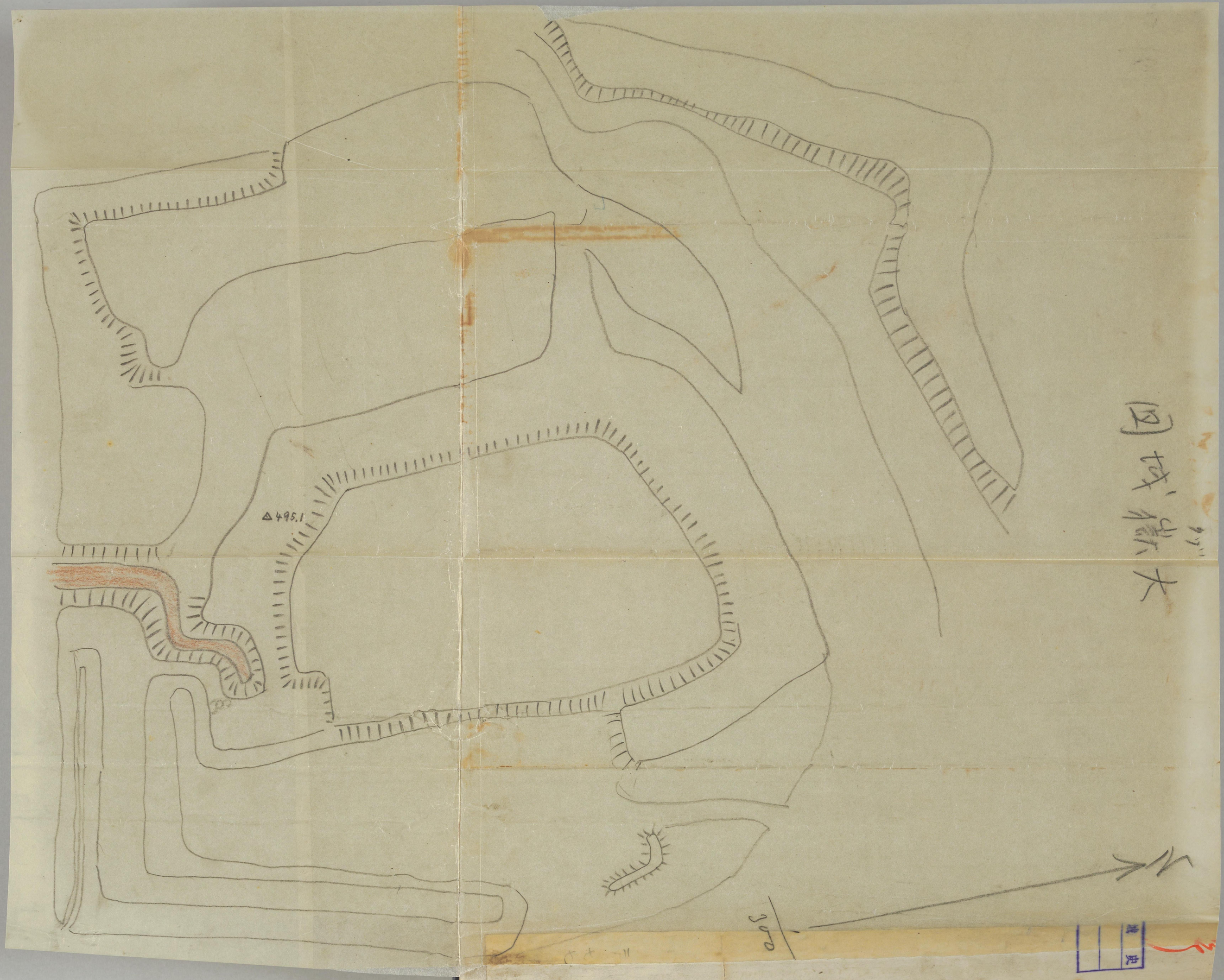
国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

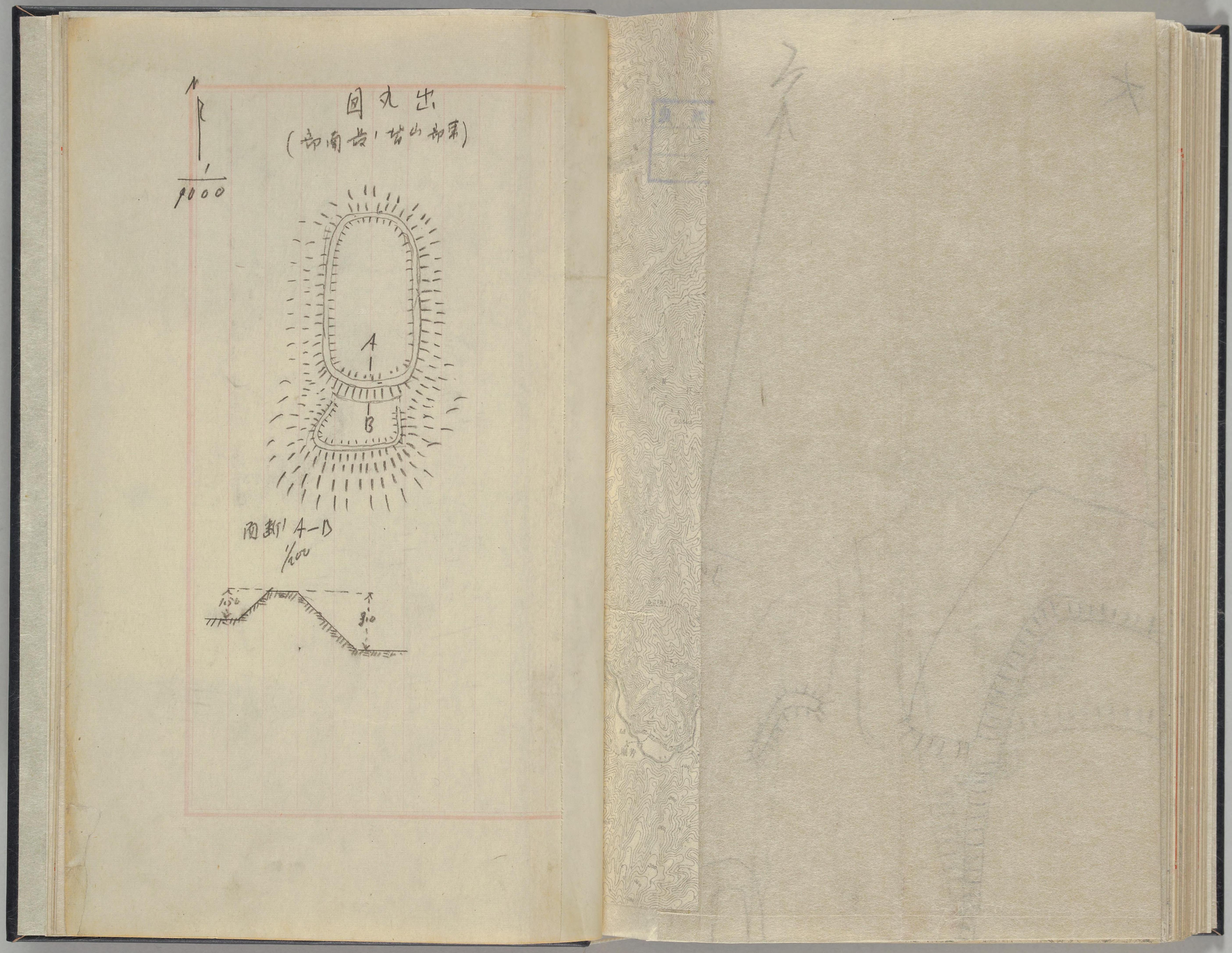


国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

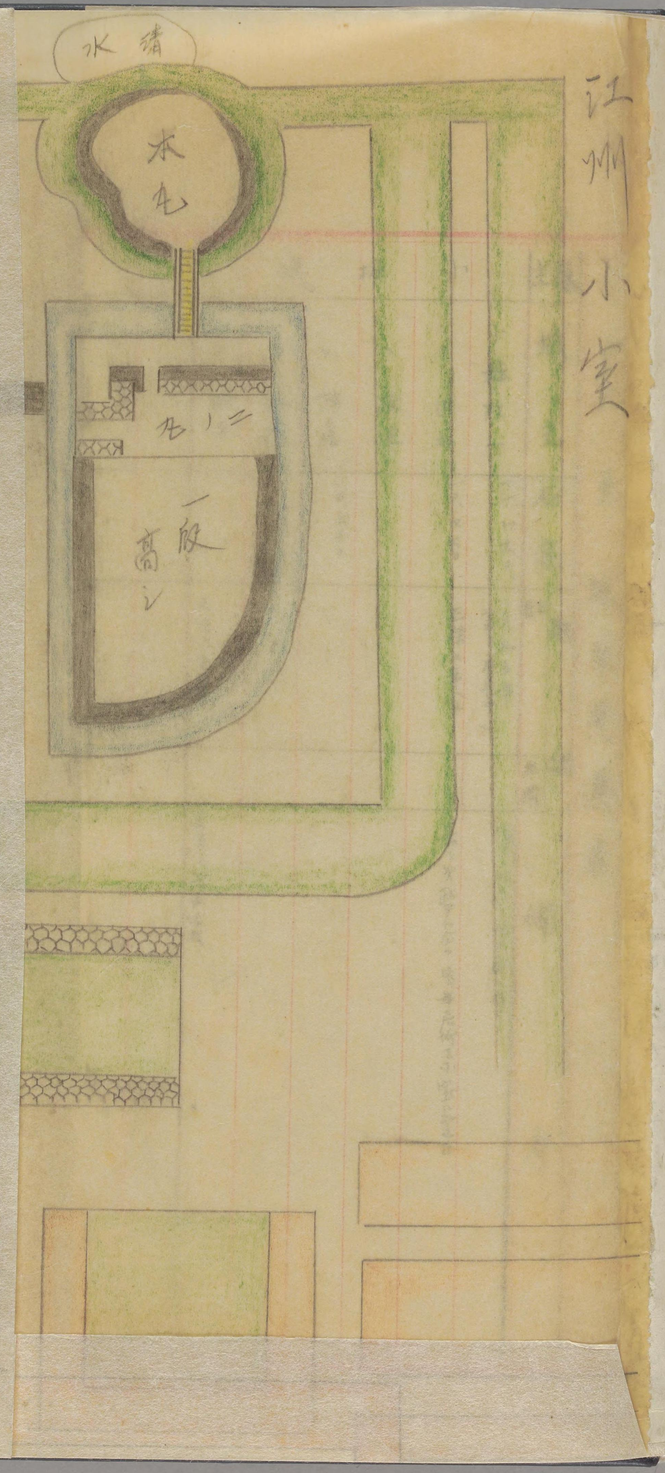
国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

国立国会図書館　[日本城郭史資料] 第22冊　本別20-4



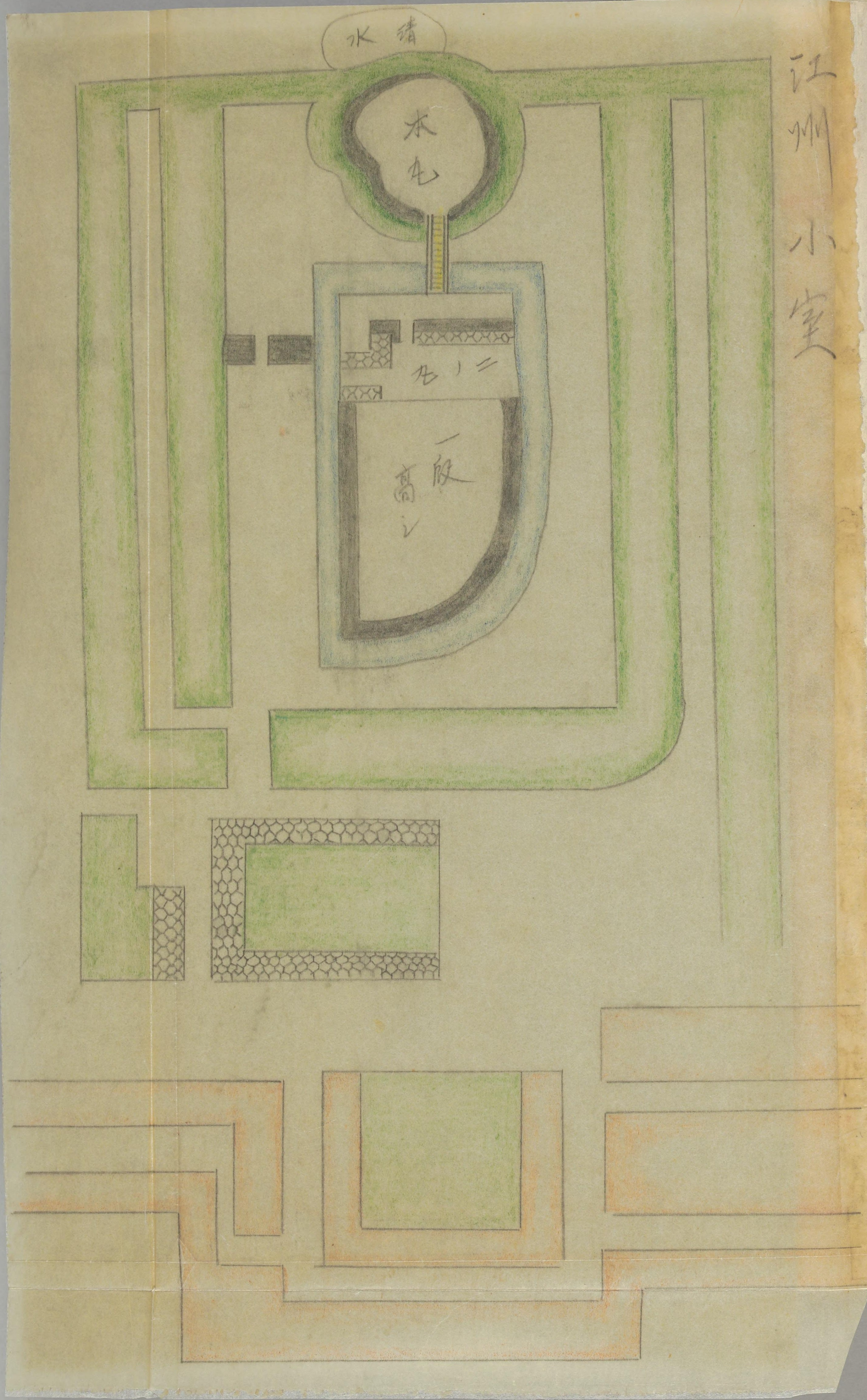


国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



江州小室

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

小室城主変遷表

藩主	城主	石高	期間 自至	期間 年限	備考
小堀氏	小堀政一	二、〇六〇石	元和五年（或は慶長中）		備中の領土を浅井郡に移さる、
〃	正之	一〇、〇六〇	正保〇年八月		千石を弟政尹に分つ 時年居所を小室に定む
〃	政恒	〃			
〃	政房	一〇、六三〇			
〃	政峰	〃			
〃	政方	〃	天明八年五月		罪あり領地没収

陸軍

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

陸軍

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

大平寺城主変遷表 附 上平寺城・小谷城・長浜城

陸軍

藩主	城主	期間	年限	備考
京極氏信（佐々木）	石高	文永二年	弘安七年	氏信文永二年（近江守に任じ正北（愛知北）お郡を分領に領館を大平寺城に居城す、八年を経て城を去る）
〃 頼氏		弘安二年十月	（一永仁四年二月）	氏信嫡男なり、
〃 満信		嘉長元年十月		満信長男
京氏		文和二年（正天八年）	明徳二年七月	京氏、嘉暦九年、管領となり、京都に在職す、正平七年、
京氏		応安元年十月	応安六年八月	京氏、嘉暦九年、管領となり、京都に在職す、正平七年、
京極氏	高秀	永和二年（正天八年）	攻死	
〃	秀綱	永和二年（正天八年）	攻死	
〃	高詮	永和大年	明徳二年七月	
〃	持光	永和十二年	永和十三年	
〃	持清	永和十三年	永和十五年	
〃	政経	永和十五年	永和十六年	
〃	高清	永和十六年	永和十七年	
〃	高峰	永和十七年	永和十八年	
上平寺城				上平寺を築き之に移り国務を上坂泰貞に譲る。
浅井氏	浅井亮政	永正十三年	永正十六年	浅井亮政上平寺を攻む高宮加を乞ふ、高宮、大国氏と亮政を攻むも大敗す、亮政遂に高宮小谷に移る、
〃	久政	永正十六年	天文元年（正天八年）	高宮の後任高秀・高吉・高次・高治より代々高宮加乞の領まる
〃	長政	天文元年（正天八年）	天文九年	信長妹お江の輿入の一部は自殺す
小谷城				織田信長浅井氏を滅ぼし九月小谷城自焼落城す
今浜城				秀吉今浜に築城す、後長浜と改む、小谷城下を
上坂氏	上坂泰貞	永正十三年	永正十八年	泰貞今浜に城を築き居る、今浜・小谷城を築く、
（今浜）	泰舜	永正十八年	天文十二年	泰舜今浜城に入り明智に従い、小谷会戦に大智し、今浜城に籠城す、
長浜城				織田信長秀吉をして今浜城を廃し長浜城を築かしむ、秀吉西征の好となり竜ヶ池畔に城を築き、秀吉入浴、城下を
羽柴秀吉		天文十年	天文十五年	秀吉をして今浜城を廃し長浜城を築かしむ、秀吉西征の好となり竜ヶ池畔に城を築き、秀吉入浴、城下を
阿閉貞之		天文十五年	天文十八年	貞之も亦城に入り明智に従い、小谷会戦に大智し、
柴田勝豊		天文十八年	天文十九年	勝豊秀吉の養子となり、秀吉の留守を守る、
羽柴秀吉		天文十九年	天文十九年十月	秀吉中国征伐の為め長浜城を去る、
山内一豊		天文十九年十月	天文十九年十二月	諸将清州会議に於て秀吉の後継を決し江北三郡を長浜城は勝豊に与へらる、
羽柴秀吉		天文十九年十二月	天文二十三年	勝豊病死の為め秀吉長浜城を去る、
山内一豊		天文二十三年	天文二十八年	一豊長浜城を守る、
石田？		天文二十八年	慶長三年？	佐和山の居城となる（現地調査）
山内	一豊	天文二十八年	慶長五年	一豊関ヶ原役に際し東軍に属し長浜城を守る、
内藤信成		慶長五年	元和元年閏六月	慶長五年九月関ヶ原役に際し信成西軍に属し長浜城を攻む、
〃	信正	元和元年閏六月		信正信成の子、

（2代）10年

（2代）？年

（3代）57年

（14代）258年

（2代）10年

6年

10年

2年

7ヶ月

10年

10年

（2代）？年

十二年、高勝病死後城代を置く、

茶臼曲輪を設け一万九千石を領し高畑に住む、

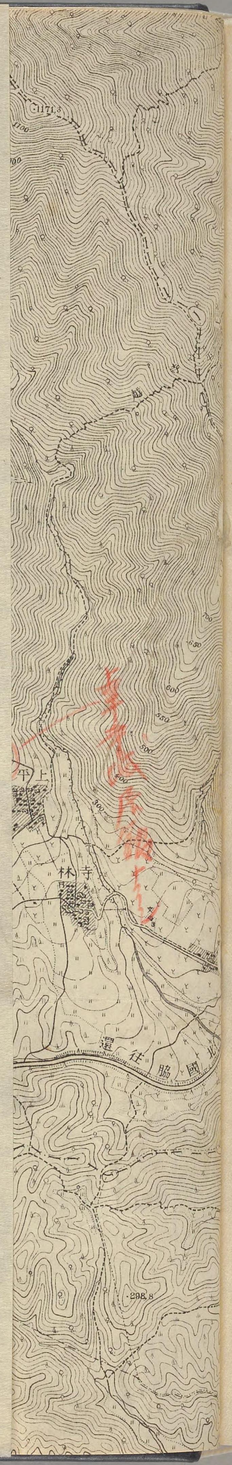
高畑へ（大田「近江」城郭考根伊に拠る）

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

城史

須

二万五千分之一



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

太平寺城ニ就テ

本城ハ別紙記載ノ如ク鎌倉時代中期ヨリ戰國時代初期ニ亘ル

二百四十五年間京極氏ノ居城ナトモ戰國時代ノ城郭ノ如ク本丸二ノ丸

三ノ丸等ノ部ノ區分ナク唯數段ノ居館址ニシテ其ノ道ハ即チ本城

ハ居館ニシテ城郭ノ形式ヲ有スル其特徴ハ

一、其ノ位置、近接國雄ニ伊吹山山麓ニ在リ

二、兩側殊ニ兩側ハ大地隆ニシテ北方ハ急斜面ヲ

背面即東方ハ伊吹山ヲ負ヒ、前面ハ急斜面ヲ

此ノ間約四百米方形ノ地ハ傾斜稍緩ニシテ數箇ノ郎址様ノ段ヲナス

三、右數階段ハ自方相地ニシテ所々ハ名称ヲ殘スモ寺坊ノ名多シ

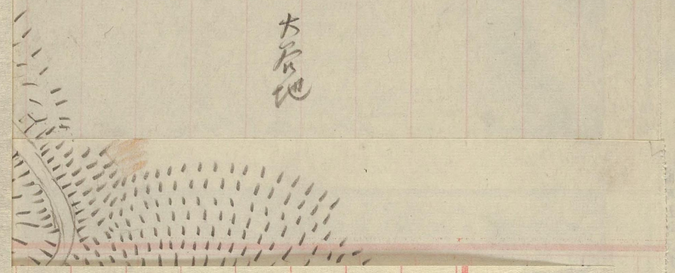
右ノ如クナルニ於テ此ノ說ヲ伊吹山上ヲ以テ設ケ事ニ變ナシ直ニ即チ八十元世時ノ時

ヲ此ニ對シテハ此レニテ十分ナリ又ノ力

陸軍

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

上平寺城図



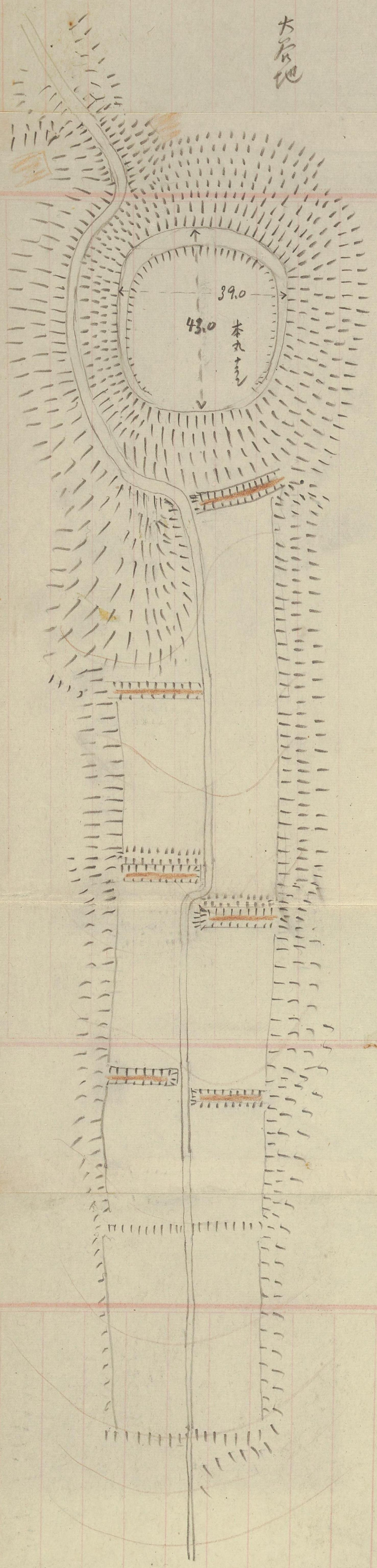
右

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

上平寺城図

N

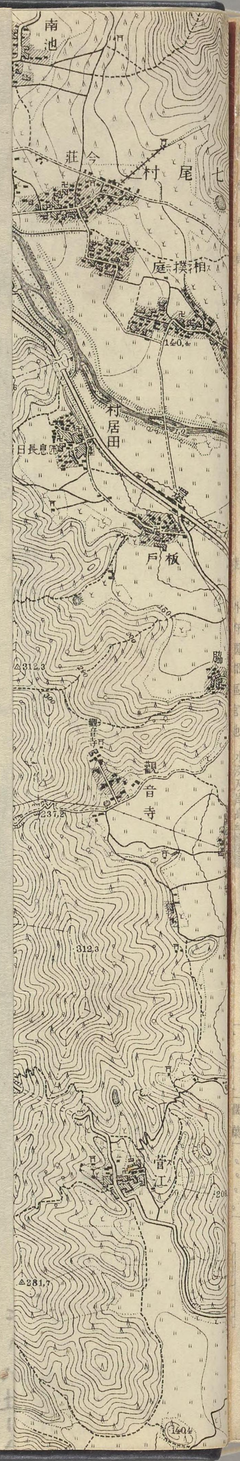
1/1000



地方人ノ云ハニヨレハ上平寺ハ古坊アリシトテ樫高665.5ノ高上方ノ高地ハ坊址明瞭ニ見ヘコトヲ得又上平寺部落ノ北部神社(俗ニ神社)附近ニ邸址ヲ見テ平坦部ナリ

本図ハ略図ノ不足ト叢樹荊棘繁茂ノ為正確ヲ期シ難シ殊ニ本丸以南ノ各部ノ東西ノ幅ハ目測ニテ見得ルノミナルノ以テ殊ニ等

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



昭和五年三月二十五日印刷同三月三十日發行
著作權所有印刷兼發行者 大日本帝國陸地測量部

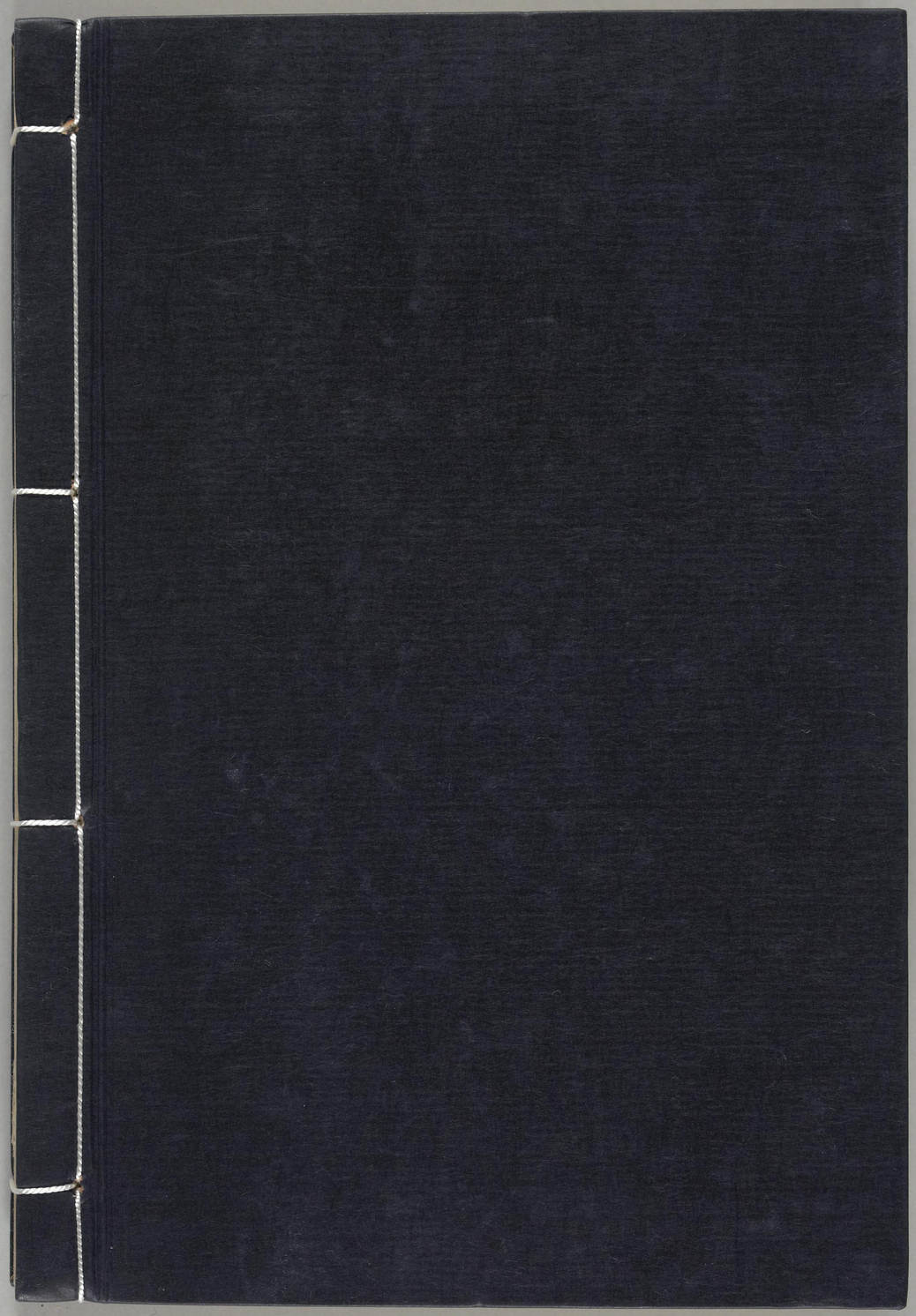
国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4

別20
4
22

国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4



国立国会図書館　［日本城郭史資料］第22冊　本別20-4